

廣益俗說辨十二

後編

僧道近世辨類
官職藝術文籍
居處地理歲時
器用佛家禽鳥
草木

13

954

13

廣益俗說辨後編卷四

僧道

補

文覺頼朝と相と執説

補

妙吉侍者ハ天狗ノ化現也

近世

補

服部幾々源父ノ教と対し

補

寒河又四郎父ノ教と対し

補

渡瀬氏此女物縁乃吏ノ教と対し

雜類人物

補

右ノ武士ノこと記ハ今と相ノと云

門 伊

954

13

補

幼児は賤衣被法に示す

補

孫のちの後のちより新と兄とを分る



人若名小郎乃字越健子説

補

武者脩行乃銳

補

わふ人佛を信じて救害紙すめり所祝

補

女ミ覲コ口ク託チヨ乃ヤ後

補

魚人^ニ其^ハ華^{ツク}送^ル時大風雨雷電あり候

補

名僧石小足乃跡と残と宛

廣益俗說辨後編卷四

僧道



文覺上人賴朝拔出之狀

倭祝云文噴上人伊豆にありて彼をみて於朝小對

面一天下と名へ相なり中をいひて我無我をもめ終

小天下と領事
古今此相人なりと云

今按予は文覚が朝と相いて天下の爲に器なり

中告我無紙者天下城領者必以子

非なりと後六代といふ相より少や孫叛とせと

せけぬよ六代と珠をれ其身ハヲキ隠岐よなるさる宛

道ゆく老母落馬して息をいへずありて家内は同じく
もろともろろの旅人となりてぬきていへりてききか
りとして某城かゝりわふふは程かゝるききかれば下
り逆旅かゝりたりて療をぬきぬきありてくたまり
又四郎大よりありて某城わたりて旅人となりて
宿かたき某城わたりて一城謝して後を名とせし
米え之内とこふ又四郎大よりありて父の死せ
しとて幼少たりて旅人の面を見たりてかゝり
おとくをいひ其座をもちて旅宿かゝりて旅人入
て衣服とて入る墨髪城はくつとありて呉橋に渡り

て之内の旅宿かゝりて家内米え之内のぬきかゝり
ききかるとぬきかゝりてぬきかゝりてぬきかゝり
子同名又四郎大よりありて尋常か勝負し旅人となりて
是は之内のぬきかゝりてぬきかゝりてぬきかゝり
ち切あひり又四郎大よりありて刀は目打とぬきかゝり
柄よりぬきかゝりてぬきかゝりて又四郎大よりありて
りきかゝりて飛退き勝負かゝりて勝負延て切かゝり
之内のぬきかゝりて何故かゝりてぬきかゝりて勝負
て勝負せりてぬきかゝりて勝負せりて勝負せり
はぬきかゝりて勝負せりて勝負せりて勝負せり

成王は多て以人より多回を家とて又四弟と罵るは又四弟
はくは孫秋は今登業試落す者なりと後うて
孫宿小ゆきて執録を承うら家名とてけり後う
て父の敵と知ぬりゆも則時小の心をあてかれも先
刻貴方う業より死にせむ老母ヨミカ頼つぬま令の
親なりとて退くもヒひをされい父へう孝とわ
るゆめより進んでうき人とすまの母の志試あうさ
ふうう所考ヒ力目訂と脱てきくかひ心をせふい
ずんとあふなりといふ久肉なまは城かう足下ソコはゆま
ひ前代未ミ少乃孝子といふるいれうは威カ威カ世うん

や今思へ我をけり貴方れ父城うらうの非道なり
うう本望逆進人をも肯さうなるて待マきれとも又
希あまは試きう承きうひは我死ん人死んと事コトハ時
刻にうきり久肉けいとして腹りき切て休きれは又
是非なり其くひを取て父の墓カ小く人母とけ縁エわ
ふ者小あつき其身の割テ髪ハツして汝の心かり父の久肉
とて後世とてふひきうをあらけぬ人のゆきひと武
士の心かと威一あつと承り

今樓ふは又四弟父の敵なりとあうハ業試受たう
汝敵とて又業をあらけいへうは汝は業とあてえう受ウケと

かゝる人ともいへ見ふ人へは幾んど父の難と見え
う其まゝうらまへ父へ不孝たり討い母も素
然や其志とわきあふ刀の目打とぬひてま
わひはさうね人とあへてわやまねく之目こ
つゝ感一貫然りてさうね人と感得さうさう
初後を新と又わらうたりうすは忠や人孝や人
うやまねく人へ暗夜の道然りてふやうなる事
もたうへ

補

渡瀬氏女物語のまゝなる敵と討死

俗説云いこのはあつたをむ武別は富樫平とてい

侍あり一う近隣の渡瀬平助といふ浪人の女は
恋慕一度々消息一をわい加れ女は乃夜にさうい
途へまゝ一返舞も富樫悦て女の方より来れ女云く
我父浪人身して朝夕此いふかきさめあがり一
は間あふ屋形より入のうて我妻はかえらねと
わけて衣服金銀等とさぬり用とさねひて明後
月のころふふあたりあふ家とたて今浪身よりな
まゝいふ人女道とてむくなまはゆるさう路路
一は世に契りてかゝる事とて来せうかゝる文婦
なりと誓紙を取かゝてわくまゝに後女屋形

出て主君の寵愛ありしかるはさうはさうの富
 櫓平三片思ふはさう者といふはさうさうの富
 風をさうさうさうさう二世とさうの富
 けさうさうさう富櫓のさうさうの富
 いさうさうさうさうさうさうさうの富
 らさうさうさう有増とさうさうさうの富
 おさうさうさうさうさうさうさうの富
 ひさうさうさうさうさうさうさうの富
 士の中さうさうさうさうさうさうの富
 敵我のさうさうさうさうさうさうの富

二人思ひはさうさうさうさうの富
 屋形さうさうさうさうさうさうの富
 ひさうさうさうさうさうさうさうの富
 今按さうさう富櫓平三片をさうさうの富
 うさうさうさうさうさうさうさうの富
 深閨小片さうさうさうさうさうの富
 さうさうさうさうさうさうさうの富
 あさうさうさうさうさうさうさうの富
 母の令さうさうさう富櫓とさうさうの富
 令さうさうさうさうさう富櫓小達さうさうの富

なう富樫は逢ふふいあも二心あり又富樫の
 片固よりれりたかの女夫の敵を討て書置
 ておめあ城を君せめて志を断ててもわさう刻
 賢女なりや鷹己う家人を流流婦とすけきて碎
 陽侯の敵を討めり又家人女は流るきりたか
 ひも辨退せり歌や古語は凡田は履代ゆきき
 下小冠城あきとあきとくき嫌疑とくき
 我を何る遠きもわく彼女とす年あもる寢席
 我同くけり柳下惠小あきこれ誰く通き候といふ
 人わんや君君余城梓とは武道は甲斐なりといふ

一偏小思ひいりや尾まう燕信といふ金一きり
 あもる満ちて幸の事といふあきふやあきこれ
 ハ珠壁城盗賊は委杯をけりあきは牆を踰る
 富樫他まは満ちてあき妖態小惑弱せり主君嫌
 疑は避りあきあきかきりあきあき不慧い上古
 来希なり

雑類 人物

補 古の武士れあきけり今ハねりきり
 俗説云いあきりあき武士ハ今ハねりあきのあき

補

な

補

續金瓶梅詞話卷之四

今按^シあ^ハ日^ノ本^ノと^ハわ^ハく^ハ人^ノ隋^ノ唐^ノ嘉^ノ話^ノ云^ハ張^ノ易^ノ之^ノ昌^ノ
宗^ノ初^ノ入^ノ朝^ノ官^ノ位^ノ尚^ノ早^ノ諂^ノ附^ノ者^ノ乃^ノ呼^ノ為^ノ五^ノ郎^ノ六^ノ郎^ノ自^ノ
後^ノ因^ノ以^ノ成^ノ俗^ノ也^ノと^ハる^ハと^ハる^ハ書^ノ也^ノと^ハ出^ノる^ハ後^ノや

補 武者修^ノ行^ノの^ノ説

俗^ノ況^ノ小^ノ古^ノ今^ノ武^ノ藝^ノ城^ノと^ハを^ハ取^ノ者^ノと^ハ日^ノ本^ノと^ハ武^ノ者^ノ修^ノ行^ノの^ノ
て^ハ武^ノ藝^ノ城^ノと^ハを^ハ修^ノ行^ノの^ノ

今^ノ按^ノあ^ハ大^ノ小^ノ非^ノなり^ハ俗^ノと^ハ武^ノ者^ノ修^ノ行^ノの^ノと^ハハ^ノ礼^ノ
國^ノの^ノ砌^ノ浪^ノ人^ノ者^ノ少^ノも^ハ諸^ノ國^ノと^ハ交^ノり^ハて^ハ軍^ノあ^ノつ^ノた^ノり^ハ
格^ノ夫^ノ何^ノ方^ノへ^ハそ^ノも^ハせ^ノは^ノそ^ノ戦^ノ功^ノと^ハを^ハけ^ノま^ノし^ノ一^ノ領^ノ
と^ハ得^ノ逗^ノ留^ノ一^ノ心^ノと^ハか^ノた^ノと^ハ怒^ノ事^ノわ^ノま^ノハ^ノ其^ノ所^ノと^ハ云^ノて

他^ノ國^ノ小^ノゆ^ノく^ハあ^ハま^ノ張^ノ武^ノ者^ノ修^ノ行^ノの^ノと^ハ一^ノと^ハ治^ノ世^ノに^ノ分^ノ
事^ノ小^ノハ^ノわ^ノく^ハ次^ノ

補 わ^ノ新^ノ人^ノ佛^ノと^ハ信^ノと^ハ教^ノ害^ノと^ハよ^ノぬ^ノ新^ノと^ハ説

俗^ノ況^ノ云^ノむ^ノく^ハわ^ノ新^ノ武^ノ士^ノ常^ノ小^ノ佛^ノ張^ノ信^ノと^ハを^ハか^ノう^ノ罪^ノ科^ノ
わ^ノり^ハも^ノわ^ノる^ハを^ハ君^ノ攝^ノて^ハ切^ノと^ハむ^ノる^ハと^ハ斬^ノ者^ノの^ノ腕^ノと^ハを^ハ
て^ハま^ノく^ハま^ノを^ハや^ノと^ハわ^ノく^ハハ^ノ殊^ノ袍^ノと^ハを^ハと^ハむ^ノる^ハと^ハわ^ノ
ら^ノま^ノの^ノ故^ノ小^ノ余^ノ張^ノ事^ノと^ハを^ハま^ノり^ハ各^ノ佛^ノの^ノ加^ノ護^ノ也^ノ
今^ノ按^ノあ^ハ人^ノ偏^ノと^ハて^ハハ^ノ親^ノと^ハを^ハか^ノふ^ノと^ハハ^ノ殊^ノと^ハを^ハ
と^ハふ^ノと^ハハ^ノ張^ノ初^ノめ^ノと^ハ怒^ノ張^ノ怒^ノと^ハハ^ノ法^ノあ^ノか^ノハ^ノ一^ノと^ハ人^ノ
た^ノれ^ノと^ハも^ハ已^ノ小^ノ張^ノの^ノハ^ノ物^ノ張^ノの^ノと^ハハ^ノ鼻^ノ鼻^ノ一^ノ

乙未年三月一日
 呪禁方人者相とありてうむるに数万人うち殺
キ
 さる者と祀り刀劍玉箭をも傷く止さずこれ
トウケン キョクセン
 わる棒を以てまうた殺しをゆるす

補
女巫口託乃說

信同女巫乃口託之婦妻此事わろし云

今樓子^ニ女^コ飛^コれ^ニ以^フ死^シハ^ニ幻^ハ術^{ホウ}乃^ニ餘^{ヨリ}流^リゆ^ニ物^{モノ}を
て^ニ告^ツね^ニと^ニわ^リと^ニ見^ミえ^ニあ^ニり^ニ又^ニと^ニわ^リあ^ニる^ニ汝^ニま
そ^ニひ^ニふ^ニら^ニく^ニ感^カと^ニね^ニとも^ニわ^リ性^{セイ}理^リ字^ジ義^ギ小^ニ云^フ
ひ^ニく^ニ人^ニわ^リく^ニは^ニ城^ニと^ニあ^ニふ^ニそ^ニ書^ニあ^ニる^ニは^ニ流^リあ^ニま^ニ

又北して金山寺よみて死を歎きあつたふ佛
 事歎かた歎かたをよみ死を歎きあつたふ佛
 如よつまで水よあつて死を歎きあつたふ佛
 わりゝあつてハカツリ中を口をゝて来ハ
 まふかゝみて死を歎かたをよみ死を歎かたを
 小とれり二三月わけて漁人の死を歎きあつたふ佛
 我々人死水よあつて死を歎きあつたふ佛
 てゝあつて死を歎かたをよみ死を歎かたを
 通をる死を歎かたをよみ死を歎かたを
 ことなる死を歎かたを

補 惡人死也ハ葬送ハ時大風雨雷電あれ況

俗民云惡人死也ハ大風雨雷電あれ況

今按ふハ非なり翦勝野聞云馬后既薨臨葬曰

大風雷電太祖甚不樂召僧宗助曰太后將就電

安汝其宜得感應聲曰雨落天垂淚雷鳴地舉衣

西方諸佛子同送馬如來宜已帝大悅頃忽朗霽

遂啓輶詔賜湯白金百兩少者劉元城と葬ふ時

風雨あつ朱衣陽華し終ふ時大風浩あわりわ

る後ハ人非常なるハ天地もあはれ震く大風雷

電もあつと云ふも天一人代ふあはれ私さへく

まぬくも期ハ風雷電あはれ震く大風雷電
のいふとあはれなる

補 名僧石小石足り跡残れと云

俗民云あはれ所ハ山にむく一石僧末世ハ寺に

石ハ小石足り跡と云ふ

今按ふハあはれハ寺に跡中をわくもとれつ

かきつたる跡あはれと云ふ金臺紀聞云平陽府

侯馬驛滄河兩岸仄土上皆婦人手跡或掌或奉

跡儼然若印瀛涯勝覽云王都太山石有足跡深

二尺長餘八尺とわり此まゝ一日中あも多し

廣益俗說辨後編卷四

廣益俗說辨後編卷五



官職

補 玉體タイ少シ以リ説

補 下官ヤカレ少シ以リ説

藝術

補 石臼イレウスケイ藝イ術ス少シ以リ説

補 他イ乃レ藝イ術ス少シ以リ説附わとあふといひ説

補 他説イと我説レとと説

文籍

補 新板書籍ヒツ少シ以リ説

居處

補 大黒柱コウハシラ乃ノ説セツ

地理

補 日ヒ本ホ末マ乃ノ説セツ

補 暗明アンメイ乃ノ説セツ

補 水無河ミナナカハ乃ノ説セツ

歲時

補 月ツキ成ナリ擇セ乃ノ説セツ

器用

補 纒ハル乃ノ説セツ

補 五明ゴメイ乃ノ説セツ

佛家

補 本モト像ゾウ畫ガク像ゾウ光ヒカリ放ハナ乃ノ説セツ 附 鏡カミ小佛コブツ乃ノ説セツ

子コ説セツ

禽鳥

補 常トコヨ世ヨ乃ノ長鳴ナガナリ鷄トリ乃ノ説セツ

草木

補 伊勢イセ乃ノ濱ハマ萩ハギ乃ノ説セツ

補 俗説辨或問

俗間貴人

今按ふは非なりある令院僧正純云玉體寶步ハ

草木

帝世の尊貴人

金品無河の

る

本朝畫新表が好の

所 謝小新が

玉體の

廣益俗説辨後編卷五

雜類

官職

補 玉體タイの

俗間貴人と稱して玉體と書とれあり

今按ふは非なりある令院僧正純云玉體寶步ハ

帝王太上天皇小限カキツていふ事なり后ミコ文等とし

るは源とあり況や元人をや

補 下官ヤツカレの

俗間レウの稱して下官と書とのあり

今按多官わふものハ称さる一友たにものハ称
まう次杜氏通典云宋孝武帝多猜忌諸國吏
人於本國君不得稱下官本爲王者避臣之稱と
わね紙考知へ

藝術

補 石臼藝の流

俗流云用よきぬ藝試がーは覺とるもれと石
臼藝といふ

今按多一書云武田信玄の家人長坂長閑と
よもの今川氏と小栗氏政と二人の題名わふ

經冊二枚と信玄は足留事り氏真を甥ふて氏政
と皆たよは信玄の孫あふれんとおまひのみさも
なて四持の武勇なてさるやかなる猫の胤
いよして毛色さふさふさふたり武篇えわさ
と全能ありともてさるやかなるといふる一武
勇ハ武士れ能なり家ハ能あもわぬ道れを
ふさるあも能多をし石臼ハ種く用よきとと
座敷よハわき次茶臼と茶試と一能少て座よ
とふさるあも人れ能とさる石臼藝たりと批
判とさるさるわり
執て武まといふ人者先武藝を
表わて他の執藝と表よる人

固てふふよひしき良秀存る母家のみ成るひありは
 わる人古田御うまうゆーとやとあふふれとまうく織りん
 度と乃武功ありあうとてもばひは柔陽を好て名をうき
 武功くもて知人希ありとて用ひきぬらさうけう又わく武
 士連歌をたーなみうう。朋友は老人ありううやきうハ足
 下乃我らも連歌のうきとてさうてそわんまれと連歌の
 といふんはたうきとてさうてさうてさうてハ武名れ
 といふもさうてさうては乃さけさうもわんうきうハ
 といふ大見ーけうとさうてさうて
 といふうきうは乃さけさうもわんうきうハ
 龍城屠ふふと城三年すふひ枝たひて巧を用
 ふとるうけー鏡々居詩草雜興詩小漫學屠龍技
 不惜平黄金技成無所用寥々感知音少くわうあ
 といふ賦より文武の藝とは講せさうてさうてさうて
 藝となひて目とけうあうをわんうきうハ

和したく藝を好くしつゝと世に目くらまされし事
 うもよらうてあまはれとせ先て石臼磨り今
 もわきや

他、附 藤をうけ、
あきふく、
花鏡

信託云他乃塵埃之土是彼之難言之者也
人主者必反之所不方

今様新し武田家の臣内教修理の院は諸木の
中ふ名を記本一本わりは木うし屋う松う檜
うまうなりとく沙汰を記本ともりし屋うき方ハ
何ぞとてえと我ハ捨つてうはわきあふとてつひは

淺草中波上魚鷹食味飽何曾餓死信天翁とわ
他つれと我れとと我者も此信天翁小相あり
文籍

補 新版書籍の説

俗同近年印行され下り書籍多し
貝原益軒翁云今世之薄俗捨古昔之好書而不
取以流季淺末鄙俚文字爲耽音如書林之所鏤
刻亦徇俗情之所趣尙觀其所刊布而世情之變
態逐時卑薄可知而已此説なりとく近世刊行の
書十小九と妄他なりと云ふは誠と云ふ人多し

少や書に引く證と云ふ多し一たけりたてと形
予 かくて和書考とありと云ふ實録なりと云ふ
作と省きり考へありと云ふ取捨と云ふ

居處

補

大黒柱の説

俗説云本朝密宗代祖師異邪なりと大黒天神の密法
と傳へありと云ふ家内豐饒の祈禱なるは家内中少く
大なる柱を云ふ大黒柱と名つきて大黒天神の像
と安置す

今按ふに世説よりて據なりとあり大黒柱とは

書せども人極極と書其家大中亦立於極大
 極と名付きて心所漸弱^{ハシス}心所漸強^{ハシス}心所漸弱^{ハシス}心所漸強^{ハシス}
 柱一氣之起天地之形^{ハシス}陰陽之源萬物之體也^{ハシス}岩
 窟本縁云天瓊玉才亦名天逆^{ハシス}亦名天御量柱^{ハシス}
 名心御柱也惟是天地開闢之圖形天御中主神
 寶也度會延佳神主云天柱國柱心柱ハ皆中極
 の表たり其所より心所漸弱^{ハシス}心所漸強^{ハシス}中極代表
 見於一^{ハシス}心所漸弱^{ハシス}心所漸強^{ハシス}中極代表
 ありその故は其中極と大極と名付きて大極大
 黒青同く未成りて誤り木像と安んずる故なり

地理

補 日本少く紫色色紙少くはぬ^{ハシス}

俗説云とある一少くは紫色色とい間色とい用ひて
 紫奪朱と説く一少くは紫色とい間色とい用ひて
 乃成すといぬハ不學れあやまちなりと云

今按るは非なり其國少くは紫色色とい間色とい用ひて
 ぬいどふ紫ハ陰陽を合し其色なり陽ハ赤く陰
 と黒し一赤黒とす一ゆきハ紫と成なり

補 晴明ノ瀧ノ記

俗説は大同四年晴明ノ瀧といあり阿部晴明ノ記を

方せし所なり

今按ふみ水なり貝原益軒云晴明く瀧と音折
嵩^{タカ}一里あり此瀧ハ岩間^{イハマ}よりかたりと流る瀧
なり十二間計もわんく甚く見事なり龍なり
瀧の上岩の間みちあり此下れ迄蜻蛉乃小蛇と
て名なり細く蜻蛉^{カゲロウ}龍なりへき沢わやまりて
晴明く瀧と書なり

補 水^{ミヅ}無河^{ナカハ}の流

俗説云常陸國水無河とは^{ミナモト}水なり年々一處
おふ^{ミナモト}よみ^{ミナモト}河と名はく

今按ふよ非なり常陸國誌云水無河倭訓美奈
乃加波即筑波川源出筑波山西麓遠源出下毛
野圃^{ノノ}壁^{ツツ}西那珂真壁地遇筑波山麓入新治郡東
流爲西川二川出同郡土浦城南入箕幡江是即
櫻川也其一南向入信太郡地會箕幡江舊記云
水無川源出筑波爲水無河流入櫻川其源自地
中行故人不見其水所由出とありゆ^{ミナモト}考へ^{ミナモト}
歳時

補 日^ヒ紙^シありぬ^{ミナモト}後

俗同浮屠^{フツ}巫覡^{ミカド}はそ日時とありぬ者なり

今按多日時とあるふと非なり陳留謝肇謂云
 古人事之疑者實之卜筮而已治亂吉凶考之星
 緯而已未聞擇日也則通天下用之矣而吉凶禍
 福率不能逃也甚矣世之惑也余嘗以破日娶妻
 矣不逾年而得雄嘗以月忌上官矣不數載而遷
 以天賊日解水衡萬緡矣而卒無恙嘗以空亡日
 出行莅任矣而諸事盡遂其餘小事不可勝紀故
 謂陰陽曆日可盡廢矣少者或考之但一日
 或擇故也とあるふと妄なり或曰汝謝肇謂云
 當否汝あるもて後之曉也かき強記なりと云

を理ふるやうなり

器用

補 鏡の説

俗説云鏡ハ軍陣小て敵とくともあつたにあらる
 るものありけり物あり

羅山子云弓馬乃家ノ軍陣にたれ母衣とあるふ
 やわり胞衣とあるふとあるふ人胎肉とあるふと
 胞衣小はくまねとあるふ動亂あるとあるふ念ふ
 かりわが心靜けりて虚をあるふたのうけ懐む存小
 白又とあるふれとあるふ矢石あるふとあるふ試みるふとあるふ

倭國平乃神書此解小常世乃長鳴も代統分明か
發せ

今按ふ桂海虞衡志云長鳴鷄高大過常鷄鳴
聲甚長終日啼號不絶とあるなり

草木

補 倭國の濱萩の佐

俗説云倭國の濱萩と云第此事なり

今按ふよ萩なりと荒木田盛微の神風小名号云
倭國の濱萩ハ二見郷三津村北南乃江ニあり
又十餘川北来なり雖波乃萩と倭國北濱萩と

りなり是なりと 萩ハ物の名もあらずかそりきり地

なり、此より所なり加れ芦ハ常乃芦よりなり
たにすれなり 大和系附録ハ倭國の濱萩ハ三津村
乃南此よりなり片葉乃萩ハ常の
芦中よりなり萩ハ萩と云ふハ
濱陽難也倭國萩拾遺小なり 少とわ萩萩考へるなり

俗説辨或問

或問云一書云俗説辨小野小町と玉造小町と
萩友人とをわすれたるなり小一人なりと託するとい
りん答云前もとおせり小野小町と玉造小町と別
人なり空海と小町と時代懸隔なり石見女式小野

小町弘法大師入定の時生年四歳なりと云わり
あまの御魂の老妻とて空海は遠く後門のあかり
知へし殊更王造小町書も文猥陋鄙劣なり後人此
擬作なりと明き。○或向云一書云俗説辯は
松浦佐用姫為りま石中より偽なりとて二程全書
の説と引て論じりて然るも女子代望ま石よりなり
と然也説神異經小記一和歌少も讀みとてま本集
白氏物語に載せり一念力なりと云ふなりと云ふ
理と云ふなりや俗説辯の論氷を融かすなりとわり
答ふにまも學者をききし時一と云ふ理は精なり

これ後説を此後小後て用ふなり後て用ふなり
さへまのハ皆一と云ふ怪誕猥陋の書然るもさう
用ふものゝあつたをみれば孟子も書く書然る世
ハ書きたるゝと云ふなりと云ふなりと云ふ俗説
の理ま石の理の非なり世説神異經ま本白氏
の書も是なりと云ふなりと云ふなりと云ふ俗
説なりと云ふなりと云ふ雜記物語のあつた
として存するなりと云ふなりと云ふなりと云ふ
わつた今もまのなりと云ふなりと云ふなりと云ふ
俗説なりと云ふなり。○或向一書云俗説辯は

乃教生石と砒石を家藏して好事者玉藻前
重代安作より鳥獸草木魚蟲水土に小毒ある
もの諸書小見くより皆玉藻前におのめんと
し一に牆破なる辨たりと一玄翁拂子にて石を
おとしつゝハまゝと知らぬ今も石を破る具を玄翁と
いふは幾なりむ本草に砒石を毒鴆より毒草を
水土に毒を執ると云ふ一に本朝奥羽金澤の人捕
砒州玉川に毒水をおとしとて彼を彼たり是れ
是なりと玉藻前の惡靈石と云ふ新と云ふ人々
を此よりいふに答て云く玉藻前の靈教生石なり

玄翁拂子に就いて石を破るは毒草を執るに
毒といふは安化雜記に砒石に碍しむる中て歷
代皇紀編年集成續世繼神皇正統記本朝編年錄
玉代一覽等乃流實錄に及びて此一若悟道の僧座
禪にかゝり拂子に就いて石を破るは實あるハ
あそびくとも今も世に悟道僧も有るハ此
今中録にて小石なりと云ふてあるハ一拂子
より此より中て中へ未だ此一又草木水
獸蟲に毒ありと教生石と別なり彼ハ彼なり是
ハ是なりといふは非なり物皆一理ありと云ふは已

たうとて固有の明德はくくまのつりましくふれ
甚しきなり。○或同わふ儒士のいさく非道を
夷狄の道なりとせは極よまじきといふむ答云く
其國よりこれ穀をくひかうし非をさるる所利
夷狄の道とくし教者たまはれたるよりいさく
君よりむかひなりて父をさしおこし天地不容れ
大罪人なり山崎翁加藤親よ我國よりかかれて儒
教なりとて非なりとさるる身は同なりとてあう
いさくこれ通しき教なり教道人よむかひと
いさくこれ得んやといふと同人いさく儒者れ孔孟と

儒者家こと同月れ如くゆふとも孔孟は徒若我國
小來に冠裳なすはわの條をんそ孔子無の徒とさけや
あひひきてハ萬戸侯に封きし死てハ帝に左右に在
りとも他は黨にて我父母に國は危くまふむや一之
りとも非なりとせは我見おこし一固言非書を死
者儒書とて神書の寶とハまふ一是儒教にの
て神なる羽翼とち候なり舎人王に日本紀と稱せ
るは一とせはあも淮南子に文はきて非は卷の首に
載るふ例なり一かあうき一も非道にめて儒教よ
混雜とせはかうも混雜とせはいさくハあはれ

邦乃異方なりと云々神道を學ぶ者此を以て
志す者多かり他篇よりききしよりいふも累
多きを以て神道訓状よりて精く志すべし

廣益俗說辨後編卷五 大尾

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 神道, 俗說, and 辨後編）

僕憂嚮所著俗說三編末
全備而輯錄廣益俗說辯
及後編二十五卷贈諸書
肆再登梨棗將謂觀覽士
以予為俗說之董狐歟撫
掌大噱記為之跋

肥後州隈本府 井澤長秀書

神道訓

廣益俗說辨又續編
近日可印行之



文化九壬申晚冬求版

浪華心齋橋通北久太郎町
書林 加賀屋善藏梓

